
恋愛系掌編の小箱

よしなが あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛系掌編の小箱

【Nコード】

N6007A

【作者名】

よしなが あこ

【あらすじ】

思い立った時に、それとなく書き連ねる予定の恋愛系掌編。ファンタジーも現代もジャンルまぜこぜです。

夜明け前（ファンタジー）

「明日早いでしょう。いいの？こんな時間まで・・・」
「いいよ。どうせ眠れやしないんだから。」

長く真っ直ぐな、月の光のように淡く輝く髪の少女は、淋しそうににこりと微笑んだ。その隣に寄り添うようにして座っている少年は、月明かりすらも避けていくほどの、漆黒の衣服を身に着けていた。

「綺麗ね、お月様。」
「ああ、綺麗だ。」

二人は同時に、月を見上げながら手をつないでいた。それまで手を触れたことがなかった二人は、初めて感じる相手の暖かさに胸が締め付けられた。

「・・・あったかいのね、手・・・」
「意外だったか？・・・あったかいんだよ。」

少年は、長い爪で少女を傷つけぬよう、労わりながらその白い手を撫でた。少女は月を見つめたまま、その優しい仕草に目を細める。

「ずっと、こうしていたい。」
「・・・俺もだよ。」
「どうして、明日がくるのかしら。」
「どうして、なんだろうな。」

少年は静かにそう言うと、ゆっくりと立ち上がる。少女もまたそ

の後に続いて立ち上がり、二人は向かい合った。月明かりに照らされた少女の目に光る涙を、少年はそっと指で拭う。

「もうすぐ夜明けだ。行かなきゃ・・・」

「・・・そうね。」

小高い丘の上、見上げる空が白み始めた。

同時に、彼方の空や山々に、無数に蠢く異形の魔物たちがあふれ出す。そして丘を臨む都市の城砦に、数多の兵士たちが続々と配備され始める。

少年と少女は静かに一步步離れると、哀しげな目で見つめ合った。

「さようなら、魔界の王子様。」

「さようなら、城塞都市の聖女様。」

夜明けとともに、戦いの火蓋が切って落とされる。

少年は、微笑んでつぶやいた。

「この命ある限り、おまえを想い続ける。俺の心は、おまえのものだ。」

少年の黒い翼が大きく空に広がった。少女もうなずいて答える。

「私もよ。この命ある限り、ずっとあなたを想い続けるわ・・・」

黒く大きな翼を羽ばたかせた少年が彼方へ消え去るまで、少女は
ずっと丘に立ち尽くし、その姿を見守っていた。握り締めた手に残
る、少年の暖かさを胸に刻みつけながら。

・・・夜が、明ける。

無心の剣（ファンタジー）

激しく打ち合う剣の鋭い音が、訓練場の高い天井まで突き抜けていく。

なぜだ、俺はどうしてこうも必死になっているんだ？

こいつが、俺の恋敵だから？

その彼女が、訓練場の窓から覗いているから？

訓練場でも指折りの剣士と呼ばれた俺は、自分の感情を律するのに必死だった。相手の剣を受けながら、自分の荒ぶる心と格闘を続ける。

剣に感情を乗せてはならない。何度となく師範に指導された言葉だ。

剣士は相手の太刀筋から、その気迫や想いを読み取ることが出来る。だからこそ、乱れた心で剣を振るってはならない。それを悟られたら、負けだ。

そうとも、負けだ・・・こいつにだけは、悟らせるわけにいかない。

こいつも、あの子も、気心の知れた幼馴染だ。

俺は昔から、彼女が大好きだった。同じくらい、こいつのことも大好きだ。今だって一緒に酒を飲んだり、剣術の練習をしたりする親友だ。

こいつが、彼女への想いを俺に打ち明けた時。俺は先手を取られ剣を落とした敗者のような気持ちだった。もはや「俺もだ」と、素直に言うこともできなかった。

こいつは、剣を持たぬ心の闘いに真っ向から勝負を挑み、そして、勝ったのだ。俺はその闘いに挑むことなく、また挑む勇氣も持たず、

闘わずして・・・負けたのだ。

気合を込めて飛び込んでくる奴の剣を受け止め、鋭く流して返す。耳障りな剣の軋みとともに、押し返されて体勢を崩したあいつに向かって、俺は容赦なく踏み込んだ。

「それまで！」

剣が、奴の喉元にあてがわれたまま静止する。

尻餅について息を切らせるそいつから剣を引くと、俺は手を差し出した。奴もにこりと笑って俺の手を取り、立ち上がる。

「ちえっ、やっぱりおまえにはかなわないな・・・連戦連敗だ。」

「まあな・・・ほら、彼女見てるぜ。」

彼女が訓練場の窓から手を振って笑っている。奴も笑顔で手を振り返し、また負けちまったよ、と叫ぶ。

俺にとっては、二人の微笑みは「勝者」の顔だ。

その笑顔を喜ぶ親友としての俺と、それを激しく妬む男としての俺。闘いの時だけしか現れない醜い俺の姿を、こいつには絶対に見透かされてはいけない・・・

・・・せめて剣だけでも、おまえに勝たせておいてくれよ。

頑張れ、私（現代）

梨香は、泣いていた。

水色の封筒を握り締め、公園の片隅にあるベンチで、静かに涙を流していた。

「・・・元気だして、梨香・・・」

親友の沙織が梨香の肩を抱いてくれる。梨香はうなずきながらも、まだ涙は止められずにいた。

通学電車でいつも一緒になる他校の男子生徒に、いつのまにか惹かれるようになっていた梨香。移り変わる季節の中、毎日その横顔を見ているだけで幸せだった。切ない恋心を親友の沙織にだけは打ち明けていたが、告白などという大それた事は、考えた事もなかった。

「ねえ、もうすぐ卒業だよ。このまま何も言わずに離れ離れになっていいの？」

「う、うん・・・でも・・・」

卒業。

静かな別れの季節になって、梨香はようやく心を決めることができた。

大好きな水色の便箋に、言葉を選びながら、自分の気持ちをためていく。何度も、何度も読み返し、書き直した。そうしてやっと書き終えた手紙。

卒業を明日に控えたその日、駅で彼を待つ。

不安と緊張で震えてくる梨香を、沙織は遠くからガッツポーズを

しながら見守っている。

次の電車がやってくる十分前くらいになって、遠くから見慣れた学生服が歩いてくるのが見えた梨香は、手紙を握り締めて深呼吸していた。

大丈夫、大丈夫・・・手紙を渡すだけでいいの、それだけでいいんだから・・・！

飛び出しそうな胸の鼓動を押さえて、梨香は心の中で何度も同じ言葉を繰り返した。火照る顔を撫でる3月の風の中、顔を上げる梨香。

彼は、目の前にやってきていた。

「・・・！」

呼吸が、止まる。

通り過ぎていく彼。

その隣に寄り添う、髪の長い女子高生・・・

梨香は反射的に、手紙を手の中に握り締めて隠した。

遠くを見つめる視線の端に、彼と彼女の仲むつまじい様子が映る。腕を組み、寄りかかりながら笑いあう姿は、誰が見ても間違いなく相思相愛だった。

梨香は静かに駅から離れ、沙織のいる方向へ歩き出した。沙織もまた、梨香へと駆け寄ってきていた。どう声をかけていいか分からずにいる沙織へ、梨香は静かに微笑んだ。

「・・・沙織、ありがとう・・・やっぱ、だめだった・・・」

「梨香・・・！」

そこまでつぶやくのが精一杯だった梨香。

後はもう、涙が邪魔をして言葉にできなかった。

駅の近くの公園が、夕暮れのオレンジ色に染まる。

ようやく泣き止んだ梨香にスポーツドリンクを手渡して、沙織がつぶやいた。

「ほろ苦い、高校生活最後の出来事だったね。」

「・・・うん・・・」

「そろそろ帰ろう。明日、卒業式終わったら皆でカラオケするんだから、体力温存しとかないと。」

「沙織・・・何曲歌う気？」

「梨香が腹抱えて笑うまで、よ。」

沙織に促され立ち上がった梨香は、泣き濡れた顔で、ようやく笑った。

涙で滲んだ宛名の手紙をそっと鞆にしまいながら、手紙を公園のゴミ箱に捨てて、もし誰かに拾われたら困るから、自分の部屋で何とかしよう考える。

そんなことが頭に浮かんだ時、梨香はちよつとだけ、自分を褒めてやりたい気持ちになった。

頑張れ、私。

最低 1（ファンタジー）

「いやあ、これから毎日楽しくなりそうでよかったよ。」

久しぶりに会えた休日の午後、ルイはそう言ってにこやかに笑った。街の小さなカフェの窓際の席で、怪訝そうな顔でルイを見つめるシシィだが、ルイはそんなシシィの視線もまったく見えていないかの様子で語り続けていた。

「好きで進んだ魔法薬研究の道だけども、やっぱり先生や同僚が魅力的じゃないと研究意欲も薄れるだろ。その両面で、僕は恵まれてるんだなと思ったよ。」

魔道学校を卒業し、魔法薬の技術を身につけたいと願っていたルイは、念願かなって大陸随一の魔法薬研究所で学ぶ事を許された、いわゆる天才肌だ。シシィはルイの元同級生で、とりあえず「彼女」ということになっている。

というのも、「付き合おう」とか「好きだ」とかいうセリフが二人の間に一度もなかったにも関わらず、自然に一緒にいるようになった空気のような関係だからだ。ルイはそれで何も不便はなかったが、シシィはそうはいかなかった。

いつ、ルイが本当に自分のことを「好きだ」と言ってくれる日があるのか。「彼女」を自負するシシィとしては、やはり「彼」であるルイに最初にそう言ってほしかったのだった。

しかし、ルイは相変わらず、ルイのままだ。

「僕と同じ回復薬研究室の先輩がね、すごい人なんだ。」

目を輝かせて話し続けるルイ。シシィはため息交じりに、とりあ

えず相槌を打つ。

「どれくらいすごい人なの？」

「僕より三つ上なんだけどね、もう見るからに博識で理知的で、こ
う・・・何て言うのかな、教養が滲み出るような人なんだ。それに
すごく綺麗で！」

「・・・綺麗？」

シシイはハツとした。先輩とは、女性のことか。

「そう！あんな美人と一緒に毎日研究室で過ごせるなんて、しあわ
せだよ・・・」

うつとりと目を細めて陶醉するルイ。シシイが初めて見る顔だっ
た。

途端に、胸に渦巻く嫉妬心。

「この間その先輩が美味しいマフィンを焼いてきてくれてさ、もう
絶品だったよ！」

どうして。

どうして？

「火傷したときには親身になって手当してくれたし・・・」

「もういいわよ！」

シシイは手元で冷たくなっていた紅茶のカップを握り、思い切り
強くルイの顔に紅茶を叩き付けた。話の途中で突然ぶっ掛けられた
紅茶が気管に入ったのか、ルイは激しくむせて咳き込んだ。シシイ

は震えながら、ルイに向かって叫ぶ。

「そんな話ばかり延々とされて、私が楽しいとでも思ってるの！？自分に惚れてる女の前で、他の女を褒めちぎるなんて・・・最低！あんたとなんか、もう絶交よ！顔も見たくないわ！！」

シシィはカウンターに紅茶のお金を乗せて、足早にカフェを出て行った。むせながら何事か叫ぼうとするルイには、振り返らなかった。目に浮かぶ涙を必死に拭いながら、シシィは走る。

こんなに好きなのに・・・ひどい。

あなたの無邪気さがいちばん私を傷つけるってことに、気付いてくれてなかったのね。

何も言わずにくつついた仲だもの、こういう終わり方が相応しいのかもしれないわ。

これでよかったのだと、自分に繰り返し言い聞かせるシシィ。落ちていく涙を拭いながら走り続け、街を出るまで、シシィが後ろを振り返ることはなかった。

最低 2（現代）

今時の髪型、今時の服装。何でも雑誌やテレビのマネをして、流行りものの最先端をいつている、と思っているマサト。どこの本で仕入れたのかと思うような言葉をささやきながら、私の肩を抱いていかにも「かつこよさげ」に微笑む。

「俺、おまえと一緒にいるときに、いちばん自分らしくいられるんだ……」

「……私もよ。」

うそ。

「男は一度に二人の女を愛せるけど、女に同じ芸当はできない」
って言ったのは誰？

私はあなたに口付けるこの唇で、他の男たちにも同じ口付けをするのよ。

朝飯前。オチャノコサイサイ。

最低？

上等よ、何とでも言ってちょうだい。

そして私はマサトと次のデートを約束して別れたその足で、次の相手シヨウタに会いに行くの。シヨウタは会えばすぐに私を抱き

たがる困った男だけど、羽振りがいいから振るにはもったいないのよね。今日はこの後、シンヤにも会う予定。

そして私はシンデレラも呆れるほどの時間に、やっと自分の部屋へ戻る。

自分らしい本当の時間を取り戻す時、私の周りには誰もいない。

プレゼントされたバッグを放り投げ、贈られたピアスを外し、倒れこむようにベッドに身体を投げ出す。胸元のキスマークに目を逸らして初めて、私は現実を見る。

ベッドサイドに置いてある鏡の中に映るのは、今時の化粧、今時の髪型。何でも雑誌やテレビのマネをして、流行りものの最先端をいつている、と思っている・・・私。

本当の愛はどこにもなく、ただ楽しみのために恋を気取り、「今時の女」を演じている。

そんな生き方に意味はない？

分かっているわよ。だけど、いいの。本当よ、とりあえず満足してるわ。

うわべだけの付き合いでも、毎日が色んな意味でスリリング、楽しいもの。ギブアンドテイクって言うのかしら。どうせいつか壊れるのが愛や恋なら、こういう関係の方が傷つくのもほんの少しでいいもの。ラクよ。

相手の気持ちも考えろ？

大きなお世話よ、そんなの。向うだって、携帯のアドレスにいったい女の名前並んでるんだもの。全員、同じ穴のナントカなのよ。類は友を呼ぶってやつね、きっと。

・・・だけどたまに・・・

こうして一人、自分の顔を鏡で見たときに思うの。

私が満たされている時間って、どこにあるのかしら。

楽しいけど、面白いけど、何だかやっぱり・・・それは本当の自分じゃない気がするの。

心の底から誰かに愛を感じる瞬間なんて、どこにもないもの。誰かと抱き合っているだけでも、私の中で何かが絶対的に「冷めて」いるのが分かるのよ。

いつか、本当の愛を教えてくれる人に会えるのかな。

そもそも、本当の「愛」が何なのかも、私には分からないから・・・無理かしら。

まだ当分、見た目とうわべだけの擬似恋愛ゴッコは続きそう。

今日の十時には、リュウジと映画。夜はアキオとクラブ。

ふわぁ・・・ちよつと寝とこうつと・・・

予感（現代）

春先の風はまだ冷たく、カスミの頬をつねるように撫でていく。隣にいるシンイチも寒そうに背を丸めて、早春の海を眺めていた。

「今日はありがとう、時間とってもらって。」

カスミが微笑むと、シンイチも笑ってうなずいた。

常に五、六人いるシンイチの遊び仲間のうちで、カスミは最近シンイチたちと遊ぶようになった「新顔」だ。

シンイチの親友の同僚ということで紹介されたカスミを、遊び仲間の男連中は「これでむさくるしさが減る」とかなんとか言って歓迎したのが、つい二ヶ月前のことだ。今では「集合」がかかると、カスミがそこにいるのが当たり前になっていた。

そしてカスミもまた、優しい異性の友達たちとの関係に満足していた。

「男女の友情は成り立つか」という昔からの難題を、カスミはきっぱり解くことができるほど、仲間たちを信頼していた。だからこそ、カスミは女友達を誘うように、自分から彼らに連絡を取って遊ぶことにも、まったく抵抗はなかった。

「でも、びっくりしたよ。いきなりカスミさんから連絡入るんだもん。」

シンイチはそう言って、海の向うに遠く揺らめく、船の姿を見つめた。

「そういえば、シンイチちゃんと二人で動くのって初めてだった。」

めんね、せっかくの休日につき合わせて。」

「ううん、いいんだ。面白かったよ、ドライブ。」

今度カスミが仕事で一日出張予定の小さな街、その道程を事前に確かめる為のドライブに、土日が休日であるシンイチを誘ったカスミ。地図を片手に見知らぬ街を走り、迷った挙句にようやく出張先の事務所を見つけてホッと息をつく二人は、傍から見ると恋人同士にも見えるほど仲が良かった。

何の底意もなく、カスミが海を見つめながらつぶやく。

「私、みんなとは夜しか会えないから淋しいな・・・一人の土日もつたいたいよ。」

シンイチはそれを聞くと、いきなりカスミに向き直り、真顔でつぶやいた。

「・・・俺は、いるから。」

「え・・・」

初めて耳にするシンイチの真剣な声に、カスミが驚いて顔を上げる。

「他の誰がいなくても、俺は・・・いるから。」

「う、・・・うん・・・」

瞬きもなくカスミを見つめるシンイチは、今まで見たこともない鋭い顔をしていた。

胸が一瞬、鋭く痛む。生返事をしたままのカスミは、それ以上シンイチの顔を見ることができなかった。

友達の目ではない。そこにある「男」の目に、カスミは動揺を隠せなかった。シンイチが嫌いなのではない。友達として大好きな存在だからこそ「そうなる」ことを避けたかった。

「男女の友情は成り立つか」。

自分で答えを導き出せるくらい強固だったその自信が、この瞬間からゆっくりと、崩れていきそうな予感がした。

想い（SF）

僕は、目の前にある銀色の装置を見つめた。美しい流線型の棺のようなそれは、冷凍睡眠維持装置。俗に言う、コールドスリープというものだ。この装置の中で眠り続ければ、肉体の衰えも無く時を越えられる。宇宙への進出が常識となった今、このコールドスリープもまた同じように常識となっていた。

宇宙飛行士たちは宇宙空間に置かれている間、肉体の老化が非常に遅くなる。この「ウラシマ効果」が大変話題になった当時、宇宙飛行士たちの間では大問題が起きていた。宇宙飛行士の仕事は何万年も離れた惑星等の探索が主で、一度宇宙空間に出ると十年以上は地球に戻れない。宇宙に出ている間、老化の心配のない自分たちと違い、地球に残された家族が自分よりも早く老いていく現実直面したのだ。

そこで研究者たちが目をつけたのが、冷凍睡眠維持装置だった。飛行士たちが宇宙へ旅立っている間、家族たちはコールドスリープで眠りに着き、その帰還を待つ。特に女性たちは老いに対して敏感なので、宇宙飛行士の家族を持っている、いないに関わらず、コールドスリープに入りたがる女性は少なくない。遠い未来にアンチエイジング技術が発達していることを願いつつ、二十年、三十年と眠り続けるのだ。

そして、今僕の目の前にあるコールドスリープにも、一人の女性が眠っている。宇宙飛行士の彼を待たために、十五年のコールドスリープに入っているのだ。僕はコールドスリープを維持整備するための技術者で、担当するコールドスリープを毎日点検している。

そんなときにふと、僕は彼女を見つけた。

歩いているところも、笑っているところも見ることがない、ましてや話したこともない、眠り姫のような彼女に、僕は恋をしていた。

でも、どんなに恋焦がれても、彼女は僕に向けて微笑むことはないんだ。彼女が目覚ます時、僕は四十歳。彼女の愛する若き宇宙飛行士に、かなうはずがない。

だけど昨日。僕は驚くべきニュースを耳にした。

宇宙船の事故で、乗組員全員が死亡。その船には、彼女が待っている宇宙飛行士が乗っていたはずなのだ。何も知らずに眠り続ける彼女のことを思うと、僕は胸が押し潰されそうになった。

翌日、僕は彼女の眠るコールドスリープの前に立つと、一人つぶやいた。

「・・・貴女が目覚ましても、そこに貴女の大切な彼はいません。貴女は哀しみに泣き伏して、その頬を濡らすのでしょね。」

僕は、拳を握り締めた。

「だから、その時がきたら・・・僕は今の姿のまま、貴女を支えてあげたい。新しい時代に目覚め、貴女にこの思いを告白する時を夢見て、僕は・・・貴女とともに、眠ります。」

僕の、無謀で浅はかで、そして純粋な気持ちも一緒に、未来へ持っていくこう。眠り続ける彼女にそっと微笑み、僕は静かにコールドスリープの開閉レバーを引いた。

大嫌い（ファンタジー）

そこには、険悪な空気が漂っていた。

満月に照らされた二つの影が、森の小立の合間に切れ切れに浮かんでいる。

「ベスタ！あんたのせいでこんなことになったのよ、詫びのひとつも言ったらどうなの！？」

「うるせえ！ダイア、おまえがあちこち色目使うから、こちとらエライ迷惑なんだぞ！」

いかにも気が強そうな栗色の短髪の女剣士ダイアは、大きな瞳でじろりと目の前の人影を睨んだ。睨まれたのは蒼いローブの男ベスタ、琥珀色の石を嵌めた杖を持った魔術師だ。

立ち寄った街の酒場で、他の冒険者たちと話し込んでいたダイア。そこへベスタが割って入ったことで一悶着起きてしまい、ダイアたちは酒場を追い出されてしまったのだ。

「色目とは何よ！情報収集だって言ってるでしょ！？焼きもち妬くのも大概にしろよ！」

「酒場の酔っ払い相手に何を聞くってんだよ、ちょっといい男見つけるとすぐに擦り寄ってって、災難に巻き込まれるのはまっぴらだ！」

ダイアとベスタは、共に連れ立って旅をしている。とある街で冒険の仲間探しをしていたダイアは、駆け出しの魔術師だったベスタと知り合った。とりあえず様子見ということで、何度か危険な冒険を二人でこなしてきたのだが、どうにも相性というものが合わないらしく、毎度こうした言い争いになってしまうのだ。

最初に旅を共にした時、すでに相性の悪さについて二人とも気付いていた。しかしいざ迷宮に入ってみると、二人は阿吽の呼吸で危険を乗り越えることができた。普段は仲違いしていても、冒険では最良の相棒。このちぐはぐさが、二人を付かず離れずの位置に押し留めているのだった。

「やっぱりあんたとはやってけないわ。ここで解散しましょ」

ダイヤが目を伏せて言い捨てる。

「それしかないみたいだな。俺ももううんざりだ」

ベスタも負けずに言い返す。

しかし、言葉ではそう言っても、二人とも一步も動こうとしなかった。

それに気付いたベスタが、ダイヤの足元を見る。

「……何だよ、やってけないんだろ。解散なんだろ？ 行けよ」

ダイヤもまた、ベスタの足元を見つめてつぶやいた。

「あんたこそ、うんざりなんですよ。さっさと行きなよ」

二人は、押し黙った。

動かない足。月明かりに落ちる二人の影が、森の木々に細切れにされている。

ベスタは顔を上げた。

「おまえみたいな気の強い女は大嫌いだ。ガサツで、大雑把で、人の気持ちも全然分らないような女」

「あたしだって、あんたみたいな細かい男は大嫌い。うるさくて、理屈っぽくて、金にケチな男」

ダイアも負けずに言い返す。

するとベスタは、それまでの口調とは違う、静かな言葉を口にした。

「……ダイア。何で、俺がいない時に他の野郎に話しかけたりするんだよ。俺が邪魔なら、さっさと別れりやそれでいいのに、そういうわけでもないし」

「……」

「俺、どうしたらいいんだ？」

「……」

「何とか言えよ……中途半端にされるのは、もう嫌なんだ」

静かで、哀しげなベスタの問いに、ダイアは目を見張る。何事か言おうとして手を差し上げかけたが、すぐに思いとどまったように引っ込める。

ベスタはそんなダイアを見つめ、ため息をついた。

「分かった、分かったよダイア、俺が悪かった。頭の悪いおまえに意見を求めたのが間違いだった」

「あつ、頭が悪いとは何よッ！大体あんたは」

「好きだ、ダイア」

「……え……あ」

ダイアの息が止まる。ベスタは頭をかきながら、繰り返した。

「好きだ、ダイア」

「べ……スタ……」

「見事に理想と正反対で、我ながら驚きだけだな。どうだ、先に言
ってやったぞ。これでおまえも何とか口がきけるだろ」

ダイヤは、あたふたと落ち着きなく手を組んだり、剣の柄をいじ
ったりしていたが、ベスタの静かな視線に耐えられなくなったのか、
くるりと身を返して背を向けた。

「あっ、あたしは……あたしだって、すっ、すっ……きよ……!」

「もうちょつと滑らかに言えよ」

「う、うるさいわね、そういうところが細かくてヤダっていうのよ!
好きって言ってんだからいいでしょ!」

「本当に?」

「ああもう! 本当よ! でなきゃ今まで一緒に旅なんかしてやしない
わ! 他の男にわざと話しかけるのは、あんたにもっと見て欲しかっ
たからなのよ! 焼きもち妬いて絡んできてほしかったの! こうやっ
て言い争いするのだって、あたしは全然嫌いじゃないの、むしろ楽
しいくらい……だっ、だから、あんたに色々言うけど、それは本気
なんじゃなくて、その……!」

やけくそになって喚き散らすダイヤの体に、ふわりと暖かい気配
が降りる。

あつと声を上げた時には、ダイヤはベスタに後ろから抱きすくめ
られていた。

「ベッ、ベスタ……ちょつと!」

「……素直じゃないヤツ。おまえみたいな女は大嫌い」

思ったよりも、ずっと強いベスタの腕の力に、ダイヤは顔が赤く
なる。ベスタはダイヤを無理やりぐると振り向かせると、悪戯っ
ぽく微笑んだ。

「でも、ダイヤは好きだ」

月明かりが照らす、一つに重なった影。

きつと明日も、その先もずっと、ダイヤとベスタは騒々しく憎まれ口を叩き合いながら、旅を続けることになるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6007a/>

恋愛系掌編の小箱

2010年10月28日04時11分発行